

最善で最新の 産科麻酔診療をめざして

本誌では2017年に「産科麻酔パーフェクトガイド」を企画したところ、多くの読者にご好評をいただいた。その年に硬膜外無痛分娩による母体死亡のマスコミ報道が続いたのは記憶に新しい。このような報道にもかかわらず、硬膜外無痛分娩を受ける女性が増加し、硬膜外無痛分娩を実施し始める施設も着実に増えている。このような現状を鑑みて、硬膜外無痛分娩の安全性を高める情報提供は必須である。そしてこの5年間にも、産科麻酔診療に関連する複数のガイドラインや診療指針、国際コンセンサスが発表された。前回特集をアップデートする必要性を感じたため、「最新」の情報提供を目的として本特集を企画した。

産科麻酔の臨床は、硬膜外無痛分娩と帝王切開術の麻酔にとどまるものではなく、妊娠前の不妊治療の麻酔に始まり、子宮内容除去術、頸管縫縮術、妊娠中の非産科手術などの麻酔も対象となる。妊娠中の手術では、その時期に応じた母体と胎児への考慮が求められる。本特集では、それらの産科麻酔の広い領域を網羅し、最新の知見を紹介した。

帝王切開術では、産科病態と緊急度に応じた麻酔管理が求められるし、無痛分娩の提供にあたっては、麻酔科医と産科医、助産師が綿密に意思疎通を図り、産婦の満足度の高い医療を提供する必要がある。何といても帝王切開術も無痛分娩も出産のひとつの形であり、産婦や家族を中心とした“family centered care”が重要だし、満足のいく出産経験により、その後の母子愛着形成と健全な子育てにつなげる必要がある。そのような視点から「最善の」産科麻酔臨床はどうあるべきかを本特集では考えていきたい。

照井克生（埼玉医科大学総合医療センター産科麻酔科）